

最近、「WITHコロナ」とか「POSTコロナ」という造語を耳にします。意図は理解できるものの、どちらもコロナウイルスとの親近感を押し付けられているようで快いものではありません。一刻も早くワクチンができて、コロナもインフルエンザのような扱いに変わり、これらの造語が廃れることを願っています。

9月1日を皮切りに修学旅行や野外学習が始まりました。いずれの学校も感染対策に万難を排した体制で臨んでいます。今後も、市内全小中学校が、貴重な学校行事を滞りなく終えられることを心から願っています。教育委員会では、コロナ対策に関わるさまざまなシミュレーションを重ねる中で、本市の教育を司る機関として、その在り方を改めて問われることもありました。学校に関わる感染情報の開示や感染者発生時の行事への対応等について、市内全校を統一する際にも深く考えを巡らしました。私たちは、何を守ろうとしているのか、誰の幸せを願っているのかと。「はじめに子どもありき」が最上理念であることは分かっていますが、現実の場面では、行政上の立場や関係者の思惑が交錯する中で判断に躊躇することもあります。これからも感性を研ぎ澄まして対応にあたらなくてはと、改めて肝に銘じたところです。感染症の蔓延という、先行事例や経験値のほとんどない状況下で、校長先生方も学校運営上の判断に悩む場面があるかと思います。そのような時は、どうか「子どもたちの幸せのためには」という教育の原点に立ち返ってご判断ください。そうして決めた方向性は、往々にして楽な道筋ではありませんが、必ず未来を明るくすることにつながるものと確信しています。

「新しい生活様式」は社会に定着しつつあります。しかしながら学校における対策は、教育的に見ると健全なことばかりではありません。そもそも学校というところは、子ども集団内のコミュニケーションが密になるほど教育力は増大し、学力向上もモラル形成も促進されます。子どもたちの関係性をできる限り密接に、かつ健全な価値観のもとに正常化すべく、様々な教育活動が展開されているわけです。にもかかわらず現状は逆行している場面もあります。その最たるものは給食です。給食は、全ての子どもたちにとって等しく楽しい、人間関係形成の場であり、学級経営の要の一つとなる時間です。前を向いたまま会話もなく静かに食べることは、食育の理念から全く逸脱しているだけでなく、子どもたちの精神衛生上も、けっして好ましいものではありません。話し合い活動は言うまでもなく、合唱や応援合戦にせよ、そういう教育的価値を包含しています。感染予防のためにやむを得ず制約していることをしっかりと認識し、不健全な生活様式の蔓延を容認しないように努めていくことは、ICT教育が急拡大するこれからの学校教育を展望するに不可欠と考えられます。人との絆の中で輝く笑顔は、子どもたちの成長の証です。今後の教育活動にさらなる工夫を求めていきたいと思えます。